
リングリング

@SHINO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リングリング

【Nコード】

N8035E

【作者名】

@SHINO

【あらすじ】

俺は友人の発明家のところに取材にいき・・・・・・・・。何でこんな目に遭うんじゃ～～！

（前書き）

昔ライトノベル研究所に乗っけた話です。

ネタを練るときは結構たいへんだったのですが、いかがでしょう
か？

廃工場を再利用した実験場。

その真ん中に、垂直にたたずむ巨大なリングあった。

肩幅ほど厚みのリング。

その外側には無数のパイプや金属の箱、電磁石のような部品が無秩序に取り付けてある。

だが、直径4〜5メートルほどあろう穴はなめらかで、内側の表面が銀色に光っている。

俺は背中に背負ったバックからカメラを取り出した。

作り笑いを浮かべた彼とリングの写真を2〜3枚撮る。

床に転がった電線の束につまずそうになりながら、リング正面に移動する。

その正面からさほど離れていない場所にキャビネットとデスクあるのが見えた。

リングとキャビネットは無数の電線でつながっている。

そしてキャビネットにはぎっしりと基盤が差し込まれていた。

デスクの上には、モニターとキーボードが置かれている。

キーボード右側の卓上に赤い大きなボタンが飛び出していた。

彼はそのリングを愛おしそうに軽く撫でた。

「僕は、世界で初めてワームホールを安定させる事に成功したんだ」

「それは、どんなことなんだ？」俺は首をかしげながら、そのリングに近寄った。

彼は手を止め、俺の方に振り返る。

「たとえるなら『どこでもドア』だよ。これさえあれば、世界中の

どこへでも一瞬で行くことが出来るんだ」

「こんな屑鉄のオブジェみたいな物でかい？」俺はリングに近寄り、電磁石のような部品を軽くたたいてみる。

「手作りにしても、もうちょっと見栄え良く作れよ？」

「信じていないな！ これを使えば富士山の頂上だって一瞬にしていけるんだ」

「だって、初めて動かすんだろう？ 何でうまくいって言うるんだい？」俺はつまずきそうになった電線の束を爪先でつついた。

彼はデスクの方に歩いてく。そしてデスクの前に置かれた椅子に荒々しく座った。

「小型装置の実験ではうまくいったんだ。見てろ！ ちゃんと動くことを証明してみせるから！」

彼は、猛烈な勢いでキーボードをカタカタたたき始めた。

俺は、鉄骨で出来た古びた柱に寄りかかり、胸のまえで腕を組んだ。

彼はキーをたたき終わりモニターを見てなにやら確認する。そして、一つづつと赤い大きなボタンに右手をそえた。

「君は歴史に残る偉大な出来事の目撃者になるんだ。今、富士山頂とつないでみせるからな！」

そんな使い古されたセリフをいい、グイッとボタンを押し込む。

そのとたん、恐ろしい轟音がした。リングの穴、両面に向かって竜巻のような風が舞い起きる。その強烈な風で周りの物が舞い上がり勢いよく吸い込まれていった……。

数週間後、また俺は誘いを受け、彼の実験場に取材に向かった。

「良くそんな軽傷ですんだな。あのリングに吸い込まれて、君が消えたときには、もう駄目だと思ったよ。あれはいつたい何が起きたんだ？」

あの時、俺はなんとか寄りかかっていた柱にしがみついて吸い込まれないですんだ。

だが、彼はデスクごとキャビネットと一緒に吸い込まれてしまった。

そのキャビネットにつながった電線の束が引きちぎられた瞬間、竜巻のように荒れ狂っていた風がおさまったのだ。

「いや、標高が高くなると気圧が低くなっていることをウツカリ忘れていたんだ」

右ほほのに残った擦り傷のあとにさわる。そして、少しレンズに傷がついた眼鏡を人差し指で軽く押し上げた。

「こっち方が気圧が高いからね。ちょうど飛行機事故で窓ガラスが壊れた時みたいに、こっちの空気がものすごい勢いで向こうに吹き出したんだ。おまけに、急に圧力下がったものだから、こっちの空気に含まれた水蒸気が霧なってしまうたんだ」

富士山で、『濃霧を含んだ突風』に吹き飛ばされてきた彼にぶつ

かつて気を失った『登山者』がいたらしい。

その『登山者』がクッション代わりになって、擦り傷ぐらいですんだんだそうだ。

彼は少し笑いを顔に浮かべて、言葉が続けた。

「その気絶した『清掃登山隊員』に助けてもらったんだ。介抱していたら目を覚ましてね。で、訳を話しても、なかなか信じてもらえなくてね。『ゴミを巻き散らかすんじゃない』って怒られてしまったよ」

・・・・・・はた迷惑な話だ。

「隊員の中に衛星電話を持っている人がいて良かったよ。君にすぐ連絡が付いたからね」

富士山からすぐに帰れない彼に代わって俺が、惨事の後片付けをさせられたのだ。

実に迷惑な話だ！

まあ、そう思いながらも今回も取材に来てしまったわけなのだが・
・・・・・・

「今度は大丈夫なのか？」俺は、ますます不格好になったリングを見回しながら眉をひそめた。

「一応、成功しているからね」

（あれは成功と言わない）と心の中で唸る、俺。

「今度は空気のように密度の低い物が通り抜けられないように調整

装置を取り付けたんだ」

（最初から取り付けとけ！）と心の中でと叫ぶ、俺。

「でも、万が一、前みたいな事が起きると困るからね。今回は気象を調べて、ことほとんど気圧が変わらない場所につなぐことにしたから、たぶん大丈夫だよ」

（たぶんかよ？）と心の中でつつこむ、俺。

「それに前回の試験運転で重大な事が分かってね」と言いながら石を取り出して俺に渡した。

見るとそれは、半分切れていて、切り口が鏡の様にピカピカ光っていた。

「どうも、ワームホールが発生する場所に物があると切断してしまふみたいなんだ。登山者がたまたま、その場所にいなかったから良かったけれど……」

「不意に現れる『かまいたち』かよ。物騒きわまりない代物だな」
つるつるした石の切断面を指で撫でた。

「だから今回は何もない場所につなぐことにしたから。ちょっと遠いけど」

彼はロープがついた幅の広いベルトを取り出し俺に渡す。

「なんだあ、これ？」

「安全ベルト、高所作業に使う物だけどね。この前みたいに吸い出されると大変だからね。これを腰に巻いて、ロープを近くの柱に巻き付けて、固定すれば吸い出されないだろう？」

思ったより、前のことがこたえていたらしい。

今回はしっかり床に固定したキャビネットとデスク。

彼は腰に巻いたベルトのロープをデスクのフックに引っかける。

俺もあわてて、ベルトを腰の巻いて、ロープを柱に固定した。

彼はキーボードをたたき始める。

そして、赤い大きなボタンに右手をかけた。

「よし！ 始めるよ」

彼は、ボタンを押し込んだ。

そのとたんどドドウーという轟音とともにリングの穴両面から大量の水が噴き出した！

そして、あつという間に周りの物を押し流していった……。

数週間後、彼から取材の誘いを受けた。

「準備が出来たので、また試運転に立ち会ってくれないか」と受話器の向こうで彼が言った。

「いや、いそがしくて、今回はいけそうにないんだ」

あれだけ酷いめにあったのだ。俺はそう言って断った。

「そうだ！ 試運転がてら、君の家にワームホールをつなげるよ。」

そうすれば、一瞬でこちらに来られるから、いそがしくても大丈夫だよ」

「……ああ、いま予定確認したら、明日なら時間があるみたいだ。明日、こちらから行くよ」

俺は渋々そう答えた。

ローンも終わってない俺の家を破壊されてたまるか！

翌日、実験場につくと彼はうれしそうに出迎えてくれた。

「今度こそ大丈夫だよ。『三度目の正直』って言うし」ニコニコ笑顔の彼。

「『二度あることは三度ある』とも言っぞー」ゴテゴテと樹脂を塗りたくられ、ますます不気味になってきたリングをみて俺はうめくように言った。

「だいたい前の試運転、何で『海の中』なんかにつないだんだ？ 装置が海水でショートして、止まらなかったら、『大水害』になっていたところだぞ？」

「いや、本当は海上につながるように調整したんだけどね。場所が遠すぎて誤差が大きくなって、下の方に出現座標がずれちゃったみたいなんだよね」

彼は笑いながらそう言った。

「笑い事じゃない！ おまけに、あのベルトのおかげで流されなかったけれど、危なく溺れるところだったんだぞ！」

そうなのだ、あの安全ベルト、ロープが短く『海面』に出られな

かったのだ。

幸いすぐ『海面』が下がってきたから助かったものの。

「だいたい何でリングの両側から海水が噴き出したんだ？ 『どこでもドア』なら裏側が向こうにつながってこっちの表側から向こうに行けるんじゃないのか？」

「ワームホールだからね。両面とも向こうとつながっちゃうんだよ」

彼はリングに開いた穴の片側を指さしす。

「だから、表側からはいると、つながった方の裏側から出てきて」「反対側を指さし」「裏側からはいるとつながった方の表側から出てくるんだよ」

「それにしても、何で樹脂を塗ったんだい？」

俺はリングの表面にゴテゴテ塗られて固まったゴム状の樹脂にさわりながら彼にたずねた。

「防水加工」とさらっと答えやがった。

「また海の中につなげる気か！」

「そんな気はないけど予備の装置がもうないからね。万が一のための用心だよ。もっとも前回の試験で思わぬ収入があったからね。いま、新しい設計の部品を発注しているんだ」とニコニコ顔。

あの時、海水に混じって大量の魚が流れ込んできた。

その中に見事な『マグロ』が何十匹も混じっていたのだ。

彼は『友人』のつてで、水産物業者に連絡を取り、結構良い値段で引き取ってもらった。

普段、色々な発明の特許使用料で研究している彼にとっても、うれしい臨時収入になったようだ。

「俺が紹介してやったんだからな。この前、取材でマグロ業者と知

り合っていないかったら、あんな大量の魚、『闇』で売ることできなかったんだからな」

当然、役所に届けでていない。

漁業組合にも届けてない。

まあ、どこからともなく、『マグロ』が現れましたでは届けようもないが。

「だから感謝して、また世紀の大実験にご招待したんじゃないか。それに謝礼だってかなりの額、渡したはずだよ」と意外そうな顔の彼。

「そういうことじゃなくて、また『マグロ漁』するつもりだったら、俺は帰ると言いたいんだ。それにその謝礼だって壊れた取材機器の修理代じゃないか」

「まあまあ、今日はいきなり遠方につないだりしないよ。まず、3メートルぐらい前方につないでみるよ」

「………最初からそれぐらいで試運転すれば良かったじゃないか？」

「あの時は、君があまりにも疑っているんで、驚かせてやろうと思ったんだ」

俺は彼に聞こえないようにつぶやいた。

「ああ心底びつくりしたよ。死ぬかと思ったぐらいに………」

デスクの横にある棚から彼が何かを取り出した。

「じゃあこれを着て」

「なんだあつ？ ライフジャケットじゃないか」

「設定にまたミスがあると………」と言いかけ彼はあわてて

口を右手でふさいだ。

俺は両目を見ひらいてどなった。

「海中につながったの原因は機械の誤差じゃなかったのか！」

「まあまあ、用心に越したことはないよ」と彼はライフジャケットを俺に押しつける。

そして、自分もジャケットを着込み、デスクに向かうとカタカタとキーボードをたたき始めた。

念入りにモニターを確認して、突然、はっとした表情になり、もう一度キーボードをたたき始めた。

(・・・設定、間違えたな?)

これはライフジャケットを着込んでおいた方が良さそうだ。

俺は2度も命を助けてもらった柱に近づきながら、ジャケットのバンドを締めた。

彼は念入りに設定を調べて間違いがないことを確認すると赤い大きなボタンに右手をかけた。

「じゃあ始めるよ」

そして、ボタンを押し込んだ。

そのとたん、ゴゴゴォーと轟音が鳴り響く。

俺はあわてて、柱に飛びつく。そして顔を柱にふせ、目をぎゅゅと閉じ必死に、しがみついた。

(やっぱり、『三度ある』の方だった！)

やがて、轟音がおさまっていった。

「・・・・・・何やってるの？」と彼の声が聞こえた。

柱に必死でしがみつきのながら、俺はたずねた。

「今度は何が起きたんだ！」

「何って3メートル先にワームホールがつながったんだよ」

「さっきの音はなんだったんだ？」必死にしがみつく俺。

「ああ、ワームホールは瞬間的に開くんだけどね。安定するまで、振動を起こすんだ。その音だよ」

「前にはあんな音しなかったぞ」といいながら、まだ俺は柱にしがみついていた。

「風の音とか水の音の方が凄かったからね」

おそろおそろ俺は柱のかげから顔を出した。

そして俺が見たのは・・・・・・。

笑っている彼にかぶさるようにリングが倒れてくる光景だった！

（マフィーさん、あなたの発見した法則は今も健在だよ。）

俺は、横倒しになったリングの内側を恐る恐るのぞいてみる。

「大丈夫かー」

ぽっかりと空いた穴から地下室が見え、どこかで見覚えのある男がリングをのぞき込んでいる姿が見えた。

そして、下のリングの内側にもぽっかり穴が開き、地下室が見え、リングが見え、その内側にぽっかりと穴が開き、その下にも、その下にも……。

「おーい、こっちだ」

上の方で彼の声がした。

見上げてみると、何もない空間に、ぽっかり穴が開いていた。そして、その穴の内側に上を見る男の姿が見えた。

その男の見上げる先にもぽっかり穴が開き、その上にもぽっかりと穴が開き、その上にも、その上にも……。

「あれは、俺だ！」

「そっちじゃなくて、こっち、こっちだよ」

空間にあいた穴の外縁からひよっこり彼の顔が出てきた。

その上の穴の外縁からも彼の顔がのぞき、その上の穴にも、その上の穴にも……。

俺はめまいがしてきた。

「うわ、凄いことになっているね」と彼は目をキラキラ。

「どうなってるんだ？」

「リング側ワームホールの表側とこちら側ワームホールの裏側が重なるように開いたんでこんな風に見えるんだよ」

「なるほど」とよくわからずに生返事。

「ところで君はどうやって上に乗ってるんだい？」

「いや立っているのは、床の上なんだけど、リングのワームホール裏側を通って、装置の上部と一緒にこちら側の表に出てきたんだよ」

頭が痛くなってきた。

「今回、装置はリングを基点して出現座標を決定してるからね。リングが倒れたから3メートル上に移動したんだよ」

「反対側に倒れたらどうなったんだ？」

「3メートル下の地中に移動してただろうね。ただ、その場合、土砂が圧力でリングの方に押し出されてきたかもしれないね」

「両側からか？」

「両側からだよ」

「危ないところだったな」と俺は震え上がった。

「そんなに大量にはでないと思うけどね」と無責任な発言する彼。

「ところで、どうして横倒しになったんだ？」

「さっき調べてみたんだけど、どうやら樹脂の下になって見えなかったボルトが振動で少しずつ緩んできていたみたいなんだよ」

要するに整備不良だ。

「ところで、ここから降ろしてくれないかな？」

「装置を止めればいいんじゃないか？」

「そうすると、ヒザから下、床においてくることになるんだ。しかも、3メートル落下することになるし」

「すっぱりと切れるってわけか」

「そう言うことなんだよ」

「しゃがんで止めたら、いいんじゃないか？」

「そしたら、腕が上に残ることになるね。それに上から装置の上部が僕に向かって降ってくることになるし」

「ワームホール移動出来ないのかい？」

「今回の設定では移動ができないんだ。安全のためにロックをかけたかったんだよ」

「飛び跳ねながら装置を止めたらいいんじゃないか？」

「冗談言ってるのかい？ それに、装置を壊したくないんだよ」

「キャビネットのことかい」

「あれが一番重要な装置なんだよ」

「リングを引き起こすことは出来ないのかな？」

「君、クレーン、操作できるの？」

「………ちょっと待てろ」

実験場を見回すと、隅の方に作業用の鉄パイプ製の脚立がホコリをかぶって転がっていた。

あれなら、伸ばせば届きそうだ。

俺は脚立を梯子状に伸ばし掛け金をかけロックする。

重い。

持ち上げるとかなりの重量があった。

俺はそれを引きずるようにリングの方へ運んでいく。

その脚立を垂直に持ち上げて、彼の乗ってるワームホールに立て

かけようとした。

しかし、脚立の上部はなんの抵抗もなくワームホールの縁を通り過ぎてしまったのだ。

なぜか通りすぎてしまった脚立上部は切断された。

そして落ちてきて俺の背中にぶち当たった。

「うああー！」

俺はバランスを崩して頭から、脚立と一緒にリングの穴に落ちていった。

落ちる瞬間、思わず力が入ったためか、脚立はリングの外の床の上に落ちた。

だが俺は、その反動でますますリングの中央に移動してしまった。俺の目の前には無数に連なったリングが見える。

リング、リング……。そのリングの群れは加速をつけて俺に向かって飛んでくるように見えた。

やがて、俺に吹き付けてくる風が目を開けられないほど強くなってくる。俺は両目を閉じた。

「やあ、面白いことになっているな」とのんびりとした彼の声がやけにはつきり聞こえてきた。

「凄いな、君は世界で初めて『本格的室内スカイダイビング』の体験者になったわけだね」

「冗談じゃない！」

「でも、ワームホールの空気遮断がうまくいって良かったよ。空気も一緒に落ちちゃっていたら、空気抵抗が働かなくなって果てしなく重力で加速されて『光速の男』になってしまったかもね」

「ふざけていないで、助けてくれー！　こんなに声が聞こえるんだから君にも俺の声届いているんだろ！」

「声が良く聞こえるのも空気遮断のおかげなのさ。もし空気が通り抜けられたら音も通り抜けてしまって、凄いエコーがかかってしまっただろうからね」

俺はなんとか仰向けになると、目を開けてみた。すると不思議なことに、空間にいたワームホールの横から顔を出した彼をはっきりと見ることが出来た。

無数に連なったワームホールもなぜか止まって見えた。

「止めてくれたのか。助かったよ。俺をここから引っ張り出してくれ！」

彼は、困った顔をした。

「止まった訳じゃないんだ。たぶんこれは残像現状だよ。なにしろ同じ所を落ち続けているわけだからね」

彼はポケットから計算機を取り出しキーをたたいてなにやら調べた。

「ほら、スカイダイバーが空気抵抗で加速の止まる速度で、この高さの間隔を繰り返し通り抜けていく毎秒の回数は、ほぼ映画のコマ数になるよ」

「なんとかならないのか！　そもそも何で脚立が切れてしまったんだ？」

「何しろワームホールは厚みが無いから何でも通り抜けてしまっじ

やないかな？ でも通り抜けると、こっちの表面は下のリングの裏面につながっているわけだし、こっちの裏面はリング側の表面につながっているんだ。だから切れてしまうんじゃないかな」

俺はまた頭が痛くなってきた。

「まあ、なんとか方法を考えるよ。しばらく楽しんでいて」

「たのしくなーいっ！」

俺はいつまでもワームホールとリングの間を浮くように落ち続けた……。

（後書き）

台本みたいになってしまってますね・・・。。
でもかなり苦勞して話を練りました<力不足？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8035e/>

リングリング

2011年1月20日14時14分発行